

野田 忠先生を偲んで

新潟大学医歯学総合病院 小児歯科障がい者歯科 大島 邦子

まだ蒸し暑い梅雨真っ盛りの7月初め、野田先生がご逝去されたとの報に接し、言葉を失いました。

野田先生は、東京医科歯科大学をご卒業後、1979年4月に、37歳という若さで国立小児病院（現国立成育医療研究センター）から新潟大学歯学部小児歯科学講座の初代教授として赴任されました。赴任早々始まった講義に続き、9月からは小児歯科外来の診療をお一人で朝から夕方まで毎日行われたそうです。私が学生だった頃には、すでに多くの医局の先生方を束ねておられました。小児歯科外来では、いつも野田先生の周りはひときわ賑やかでした。泣いて嫌がる子供も、心配そうなお母さんも、野田先生の歌が終わる頃には、いつの間にか野田ワールドに取り込まれ、笑顔で帰っていかれる様はまさに野田マジックでした。また、先生は毎月、学生のためのゼミを主催してくださり、英語の本や研究論文をつたない日本語で訳す私たちをニコニコ見守り、多くのスライドを交えて、臨床のお話をたくさん聞かせてくださいました。もちろん、そのあとはお菓子や飲

み物もふるまわれ、遅くまで懇談会が続くこともありました。どの教授よりも（小声）学生を愛し、医局の先生方を家族と呼ぶ姿を見て、入局を希望しました。

私が入局した年、野田先生はスウェーデンほか数か国に留学されました。う蝕予防の先進国であると同時に、女性の社会進出においても日本の数段上に行く北欧での生活は、男女共同参画などの言葉も存在しなかった日本において、自らそれを実践されてこられた先生の自信になったのではないかと思います。

帰国されてからも先生は精力的に外来に出られ、多くの小児や障害者の診療を継続されました。当時は非協力的な小児や障害者の歯科治療を行える施設はほとんどなく、県外からも多くの患者さんが来られましたが、野田先生はカルテがたまっていくほど、ドンドン調子が上がってくるようで、アシスト3名でもついていけない速さでした。実際、自分で診療してみると、野田先生だとサビを1-2曲歌う間に終わる診療が、私の場合フルコーラス10曲以上歌わないと診療が終わらないことは



すぐ気づいたので、歌わずにすみましたが。

その後、野田先生は1995年から1997年から歯学部附属病院院長を、2003年からは歯学部附属技士学校長も併任され、多忙を極めておられましたが、いつも優しい笑顔をたたえ、小首をかしげながらパイプをくゆらし、「構わんよ」と許してくれるいつものスタイルを崩すことはありませんでした。

また、同時期1995年からは、五十嵐で全学講義「食べる」を主宰されました。先生のご人脈を駆使した講師陣は歯学部内にとどまらず、新潟産の私でも普通なら一生お会いできなかったであろう新潟の各分野の著名人が名を連ね、聴講票の競争倍率100倍というおぼけ講義となり、2005年新潟大学教育褒章を受賞されました。

「食べる」ことに関しては、生理学のおよび解剖学的観点から大学院生とともに研究に励まれるとともに、度々医局でも料理の腕前を発揮され、

医局員にふるまってくださいました。留学生も多く受け入れ、野田先生の発案で、中国の留学生の時は餃子、バングラデシュの時はカレーなど、医局員総出で料理を作り楽しんだことを思い出します。

2007年にご退官ののちは、新潟リハビリテーション大学教授、2011年からは同学長を歴任され、昨年春、令和初の瑞宝中綬章を受章されました。

山を愛し、ご家族を愛し、小児・障害者を愛し、学生を愛し、医局員を愛し、パイプを愛された先生でした。弱いところなどおくびにも出さず、いつも颯爽とされていました。突然、誰の世話にもならず、梅雨空を吹き飛ばす爽やかな風のように、さっと去られたのは、いかにも先生だなとも思います。

心からご冥福をお祈りいたします。

(2020年6月27日ご永眠)

